20017

OCT施行時の血球除去方法の検討　Occlusion と non-Occlusion

[1]桜橋渡辺病院　心臓・血管センター、[2]桜橋渡辺病院　心臓・血管センター

森重　美穂[1]、永井　宏幸[2]、岡村　篤徳[2]、藤井　謙司[2]、佐藤　洋一[1]、岡田　裕介[1]、伊保　純一[1]、高山　雄紀[1]、織原　克年[1]、小坂　祐紀[1]、水谷　覚[1]

背景　2008年10月よりOCTが保険適応となり、PCI時のImaging　deviceとして使用されている。OCTの使用に際しては、血球除去が必要であり、当院においてはオートインジェクターを用いてデキストランＬの注入を行っている。しかし、観察病変部位によりocclusion　ballonを使用可能な症例と不可能な症例がある。今回、我々はocclusion症例及びnon-occlusion症例を比較検討し、観察病変部位、見え方、注入量について検討した。方法症例は、100例。occlusion症例50でnon-occlusion症例は50例であった。occlusion症例は0.3～0.7ml/sでデキストランＬの注入を行い、non-occlusion症例については、3.0～6.0ml/sでデキストランＬの注入を行った。結果occlusion症例と比較し、non-occlusion症例は、RCA、LAD、LCXの近位部病変が多く、見え方は、上記注入量の設定で両群ともに差は認められず、non-occlusion症例で優位にデキストランＬの注入量が多かった。まとめ　OCTにおける血球除去方法として、occlusion症例及びnon-occlusion症例では、画像の質的な差は認めず、病変部位的にocclusion困難な症例ではnon-occlusionが有用であると考えられた。しかしnon-occlusionでは明らかに注入量が多く、心機能等十分考慮の上、選択する必要があると考えられた。